

# ざいちのち 69

まちやむら、そこに住む人びと（＝ざいち）の、知恵や生き方（＝ち）から学び、実践する活動です。



京都大学  
 生存基盤科学研究ユニット  
 東南アジア研究所  
 科研萌芽研究「新しい在地の文化形成による現場型農村開発モデル」  
 地（知）の拠点事業「京都大学 KYOTO 未来創造拠点整備事業—社会変革期を担う人材育成」



## 守山フィールドステーション

### 大川活用プロジェクト・月例美崎寄合参加雑感 京都大学東南アジア研究所 安藤和雄

2015年3月24日寒が戻った日の19:00～21:00にかけて、滋賀県守山市美崎の自治会館で月例（原則月末の火曜日）の寄合が開催された。寄合をもつようになって今年で丸4年が過ぎた。美崎自治会の役員、自治会の中に設置された大川委員会の委員、守山市役所、立命館守山高校の教員、速野幼稚園の園長先生、守山市美崎公園の中村先生そして、京都大学東南アジア研究所の守山フィールドステーションの私が寄合の固定メンバーである。日によって集まる人数にばらつきはあるが、ほぼ10～20名が自治会館の1階の畳の大広間に集まって、車座で寄合の話し合いが進む（写真）。この寄合をはじめた契機は、私がバングラデシュで参加したJICA（国際協力事業団）の研究協力プロジェクト『バングラデシュの農村開発実験』に農村開発の専門家として参加し、タンガイル県のドッキンチャムリア村で農村開発委員会（その後名前を変えて村落委員会）を1992年頃から始めた経験に負っているところが大きい。

すでに当時バングラデシュなどの開発途上国の農村開発では住民参加型開発の重要性が指摘されていた。バングラデシュの村には複数のリーダー達であるマタボールたちがいて、彼らが農村社会を一つにまとめ上げていた。その力を農村開発にかけてみたいと私は考えていたのである。どんな会合がよいのかは日本にその手本を私は求めた。日本の私の実家のある名古屋北部の市境の地域では、昨年には廃止されたが、陰暦の満月の夜19時から約1時間、島または切ともよばれる地縁血縁の10～30世帯の家族の社会単位を構成する各世帯から一名が出席した集まりがあった。それは「報徳様」と呼ばれていた（報徳講であり、観音講だろう）であり、その会合の宿は持ち回りである。宿には観音様と掛け軸が持ち回りで一月間祀られる。先達が一人いて、仏壇の前で、最初に般若心経と念仏を唱え、お神酒のさかづきをまわす。それが終わると、その月々（といっても陰暦なので、太陽暦とは月がずれるのである）の村の行事や問題点、この組（島のことを組と呼ぶこともある。とくに役員選出の場合）のお寺やお宮さんの役員を決めたりする。この会合にならって、社会単位を基盤とした会合を導入したいと考えていた。

JICAのプロジェクトサイトであるドッキンチャムリア村には村（グラム）の下のパラ（4つのパラ）と呼ばれる血縁地縁社会の隣人社会の単位があり、そこにはマタボールが複数人いた。合計で20名近くを村の全体会議で選出し、毎月一回会議をもった。会議の開催前日に明日の会議の参集呼びかけの作業と、議事録づくりはJICAプロジェクトの村のスタッフが担当し、毎月の会議の議事録はかならず作成された。パイロットプロジェクトとして継続されたJICAプロジェクトは数年前に終了しているが、現在もドッキンチャムリア村ではプロジェクトスタッフにかわりスタッフたちがつくったローカルNGOが議事録づくりなどを行い、月例の農村開発会議が継続されている。継続は力なりであるが、もう一つ重要な点は、バングラデシュ人の社会では友人関係が特に大切である。毎月々の会議への参加者は強い仲間意識で結ばれるようになり、今は村社会の中で重要な位置を占めるようになった。

美崎の大川活用プロジェクトへ当初オブザーバー的に参加し

た1年間の実感から、このプロジェクトを活発にするためには、最低でも月に一度の会合が不可欠ではないのかと思うようになっていた。美崎の自治会の人たちが考えをお互いに確かめ合うことでプロジェクトの推進力が生まれるという確信が私に芽生えたのである。こうした経緯でドッキンチャムリア村の農村開発月例会の美崎自治会版である寄合の月例開催を提案した。派手なことではなく、一ヶ月に一度美崎自治会館に集まって顔を見せ合う。つきつめればこれだけである。しかし、この地味な習慣化された会合はボデーブローのように効いてくることを私はドッキンチャムリア村で体験していた。月例の寄合を維持したかったので、守山市役所の職員に寄合の事録作成を依頼した。美崎自治会役員や大川委員会委員の熱意とともに地道な裏方があるからこそこの会議が継続し、前に進んでいる。忙しく動いている日本の社会にあって、一ヶ月はあつという間になってしまう。だからこそとも言えるが月例の寄合での話し合いが、今では大川活用プロジェクトの運営には必須の組織となっている。計画がなければ物事を進めることが難しいように、計画の実施を絶えず確認しあうことがコミュニティレベルでの住民参加を促すことになる。

3月24日の寄合では、2014年度の活動の反省を踏まえて、2015年度の活動のポイントとなる事項が話し合われた。寄合がユニークなのは、自発的に四方山話的に参加者が自分の意見を述べていくことにある。2015年度の大川活用プロジェクトの目玉事業となるのは、大川河口部に2015年度、16年度の二年間をかけて川面に散歩用のデッキが守山市の事業として建設されることである。この事業に対して注文が今回の寄合の参加メンバーから入った。建設されるとは聞いているが、どのようなものが、どうやって、いつごろから工事に入るのか、また、デッキの目的や管理運営についてしっかりと案をつくって、美崎の住民に工事の着工前に知らせることが必要ではないかという意見であった。この意見から議論が建設的に始まり、臨時の寄合を4月14日（火）にも持つことになった。デッキ建設の具体的な話によって刺激が入り、デッキ以外の重要な年中行事やイベント的な行事である、2015年度3回目を迎える「夏休み大川自由研究室」（8月4日）や、デッキの住民への説明会（9月26日）、5回目を迎える「大川フォーラム」（2016年2月6日）の日取りと大まかな内容が決定された。具体的な開催の日付が決まると、具体的なイメージづくりをしなればという気もちがはたらくようになる。4月14日（火）の臨時の寄合では、デッキに関するだけでなく、上記の年中行事的なプログラムについても細部の計画づくりが行われる予定である。大川活用プロジェクトの毎月々の寄合での話し合いの進め方や、そこで交わされるちょっとした美崎の村の生活や社会などについても大変私は学ばせてもらっている。研究者が主体となって客体として地域社会を調査するというより



写真：美崎寄り合いのようす

も、各事業やプログラムを実現させようという美崎の人々のダイナミズムから湧き出てくるような話は、生きた言葉として私の脳裏に刻まれていっている。

## 焼畑のもつ害虫防除効果 その2

京都学園大学バイオ環境学部 鈴木玲治

前回のニューズレターで報告したように、2013年はエンマコオロギの発生量が比較的多かったのですが、焼畑で栽培していた山カブ、万木カブ共に子葉の食害による壊滅的な被害は免れました。これは、火入れ・播種が通常通りの時期に行われ、エンマコオロギが大きく成長する前にカブの本葉を生長させた結果であると考えられます。ただし、葉の食害は免れたものの、万木カブの半数以上の個体で、親指の先ほどのサイズになった胚軸(肥大した球形の可食部)の食害が確認されました。一方、山カブの胚軸の食害はほとんどありませんでした。

万木カブは高島市安曇川町の在来品種ですが、現在では滋賀県を代表する在来の赤カブの一つといえるほど普及し、ホームセンターでも種を購入できます。味にくせがなく、生食しても苦みをほとんど感じません。一方、余呉町の在来品種である山カブは幾分苦みがあり(青葉 1981)、特に皮の部分の苦みを強く感じます。定量的なデータはないのですが、山カブの胚軸の皮の部分の苦みは万木カブに比べて非常に強く、これがエンマコオロギの食害を免れた一因であることが推察されます。

また、岩本(2015)によれば、雑木林に囲まれ草地から距離が遠い場所を伐開した焼畑地では、草地のすぐ近くを伐開した焼畑地に比べエンマコオロギの発生量が少ないことが確認されており、焼畑を開く場所もエンマコオロギの食害を軽減する上では重要な要因であることがうかがえます。また、余呉町ではコオロギを直接撃退する伝統的手法として、「コオロ焼き」というものがあります。島上の聞き取り調査(本ニューズレター No.38)によれば、コオロ焼きとは火入れ後に焼け残った木々を集め、夕方薄暗くなった頃に焼くことであり、明るく燃える火にコオロギをはじめとする虫が飛び込んだといいます(コオロはコオロギを指す方言)。

伝統的な余呉町の焼畑ではお盆前には必ず火入れ・播種を終え、コオロギなどの食害に強い在来品種の山カブを栽培し、



写真1: 余呉町中河内の焼畑の火入れ (2014年)

焼畑を伐開する場所を考慮しながらコオロ焼きなどの手法を組み合わせることで、害虫被害のリスクを低減してきたものを思われます。

また、話は変わりますが、山下(1999)は、エンマコオロギが大発生するのは空梅雨の年であり、空梅雨がエンマコオロギの孵化期とその後の若虫期に小雨高温をもたらした結果、孵化率と若虫の生存率が高まり大発生の引き金になると述べています。本ニューズレター No.68 で述べたように、我々が焼畑を行ってきた余呉町中河内では、2011年と2013年にコオロギが大発生し、特に2011年の発生量が多かったことがわかっています。そこで、2010年～2014年の中河内の梅雨の時期(6月～7月上旬)の降水量を調べた結果、山下の仮説通りの傾向を示していることがわかりました(表1)。2011年は梅雨の時期の降水量が最も少なく、6月の降水量は唯一100mmを下回っています。また、2013年も梅雨の時期の降水量が261mmであり、2011年に次いで少ないことがわかりました。このように、梅雨の時期の降水量はその年のエンマコオロギの発生量の予測に使える可能性があり、コオロギの食害リスク低減に向けた新たな情報源になる可能性が示唆されました。空梅雨とエンマコオロギの発生の関係については、これまで地元での聞き取りを行っていませんので、そのような認識が昔からあったのかどうか、今年の聞き取り調査で確認してみたいと思います。

表1: 余呉町中河内の降水量期

	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
6月	248mm	92mm	214mm	154mm	154mm
7月上旬	210mm	145mm	257mm	107mm	167mm
合計	458mm	237mm	471mm	261mm	321mm

国土交通省水文学データベースより

参考文献

- 青葉 高 (1981) 「野菜 在来品種の系譜」 法政大学出版局
- 岩本 悠 (2015) 「焼畑における害虫防除効果の検証 ～3種の害虫の被害状況からの解析～」 2014年度 京都学園大学卒業論文
- 山下善平 (1999) 「里山の昆虫たち: その生活と環境」 北海道大学図書刊行会

生存基盤科学研究ユニット萌芽研究「バングラデシュにおける自然災害に対する防災・減災の経験知とその有効活用に関するアクション・リサーチ」の目的と2015年度研究成果報告

京都大学東南アジア研究所 安藤和雄

2015年3月25日に宇治キャンパスで、生存基盤科学研究ユニットの2015年度研究成果発表会があった。私たちグループは2015年度、16年度で、萌芽研究が採択されその成果を「バングラデシュにおける自然災害に対する防災・減災の経験知とその有効活用に関するアクション・リサーチ」生存基盤科学における地域研究の適用一（安藤和雄、星野敏、林泰一、山根悠介、南出和余）として発表した。以下が多少読みやすいように、成果報告会要旨集に掲載され内容を修正したものである。本研究での新しい試みは、実践型地域研究の一つの手法としてPRA (Participatory Rural Appraisal: 参加型速成農村調査)を改良していくことにある。私を含めて現地調査では、通例、村人からの聞き取りは、村人に聞き取りの結果というデータが提示され、確認を受けることなく、やりっぱなしであることが多い。このことが前々から大変気になっていた。それを是非改良していきかけたのである。聞き取った内容を記録としてその場で作成し、調査(大抵が4から5日間程度)の最後の日には、NGO(今回のPRAでは以下に述べるハティア島で活動するDUSの事務所キャンパス)に来てもらい、内容を読み上げ確認をとってそれに基づいて議論するのである。すなわち、村人に、自分たちの経験の記録化、知識として対象化が防災や減災にはとくに必要で、有意義であるという自覚をもってもらうアクション・リサーチのプログラムとなっていることであるのである。2016年度も継続して行う予定である。(発表要旨)

1987,88年にバングラデシュでは50年に一度、100年に一度という規模の大洪水にみまわれ、“Living with Floods”という概念が提唱された。堤防建設による土木工学による洪水の制御だけではなく、これまでバングラデシュの人々が洪水に向かい合ってきた暮らしや生業において発見され伝承された経験の法則性を重視し、そこから対策を模索しようと姿勢が打ち出されたのである。しかし、いつの間にかLiving with Floodsの有効性は議論されな

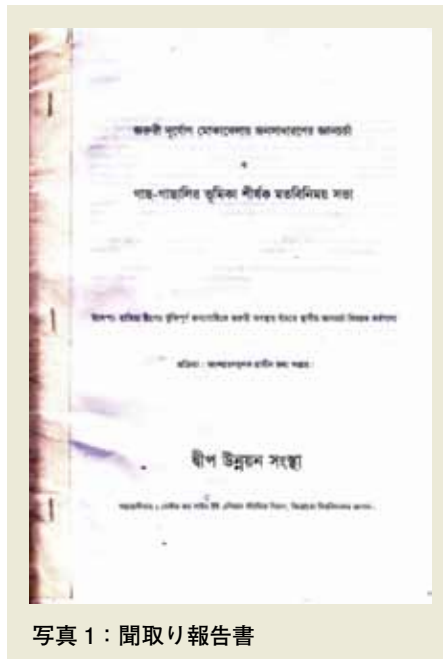


写真1：聞き取り報告書



写真2：PRAによる聞き取り（写真は筆者）

くなり、かつ、洪水と向かい合ってきた人々の経験は省みられなくなりつつある。本研究の代表者である安藤は、その背景は、人々の経験の法則性はきわめて局地的であり、それに依拠した実用的対策も局地的になるという「技術的特徴」にあると推察している。普遍性や広域性を重視する行政対応には馴染みにくいからであろう。これをブレイクスルーするためには、①局地的であることを体系化することによって経験の法則性を積極的に再評価し、②経験の法則性を絶えず人々にフィードバックしていく具体的な事業の作成、③調査から事業試行までを一連の完結した研究活動(アクション・リサーチ)が研究手法として開発する、という3点が重視されなければならない。と、考えている。この考えに基づき本研究が企画されている。

調査地は、バングラデシュのサイクロン常襲地であるハティア島(ノアカリ県ハティア郡)と洪水とトルネードが常襲地であるタンガイル県カリハティ郡である。それぞれの郡で活動するNGO(ハティア島ではDUS:Deep Unnayan Shagosta、タンガイル県ではJRDS:Joint Rural Development Shagosta)の活動村落で現地NGOメンバーとともにPRAとPWS(Participatory Workshop/参加型ワークショップ)が調査の方法である。2014年度は、バングラデシュの政治状況でタンガイルでの調査が困難なために、2014年12月1日～4日と、2015年3月4日～7日にかけて、安藤がハティア島でDUSのメンバー2名、JRDSのメンバー1名とともに調査を実施した。調査項目はサイクロン、洪水などからの屋敷地、農産物、資産の守り方、生存するための知恵や経験的知識、特にサイクロン襲来時の緊急対策栽培技術、食糧支援が届くまでの数日間の食糧確保ならびに現地のサイクロンの気象状況を調査した。高齢者を中心に聞き取りを行い、その結果を現地語(ベンガル語)でPRA報告書として取りまとめる。PWSでは、調査において聞き取りを実施した村人を招き、PRA報告書を発表し、調査結果の修正と活用方法をNGOのスタッフとともに議論し、現地語と英語でPWS報告書としてまとめた。

PRAから明らかになったことは、ハティア島では堤防外に立地している水田では今なお収穫期がサイクロン常襲期と重なる在来品種Rajashailのみが栽培されていることである。耐塩性であることはもちろんであるが、高潮や風の被害を避けるためにサイクロン襲来時にすでに登熟しているならば来襲直前に人為的に倒伏させるという栽培技術が用いられ、この栽培技術は他の稲品種では用いられないということや、サイクロン襲来翌日から数日の食糧確保に関する地域内での相互扶助的な人々の協力や、土に穴をほって食糧等を埋めるなど生活技術が広まりつつあることがわかった。

## 2014年度 京滋フィールドステーション月例研究会 Practice-Oriented Area Studies' Monthly Research Seminar in fiscal year 2014

場所 京都大学東南アジア研究所 稲盛棟 2階 東南亭  
Place : CSEAS Tonantei , 2nd Floor of Inamori Building

1 : 日時 Date and time      3 : 発表者 Speaker  
2 : タイトル Title          4 : 内容 Contents

### ■ 第 65 回 .....

1. 2014 年 4 月 24 日 (木) 17 : 00 ~ 18 : 30  
April 24, 2014 (THU) 17:00-18:30
2. アジアと日本を結ぶ実践型地域研究の事例とその意義  
The Example and its significance of the Practice-oriented Area Studies linking Asia with Japan (In Japanese)
3. 安藤和雄 東南アジア研究所  
Kazuo Ando, CSEAS, Kyoto Univ.

### ■ 第 66 回 .....

1. 2014 年 5 月 22 日 (木) 17 : 30 ~ 19 : 30  
May 22, 2014 (THU) 17:30-19:30
2. ラオス現地活動報告 - 農学部と博物館の取り組み -  
Report on Activities of the Faculty of Agriculture, National University of Laos and the Museum of the Faculty of Agriculture and the study villages. (In Japanese)
3. 矢嶋吉司 東南アジア研究所  
Kichiji Yajima, CSEAS

### ■ 第 67 回 .....

1. 2014 年 6 月 26 日 (木) 17 : 30 ~ 19 : 30  
June 26, 2014 (THU) 17:30-19:30
2. 焼畑の技術や知恵を活かした日本の里山再生と地域活性化の可能性  
Application of traditional skills and knowledge of swidden cultivation toward restoration of degraded satoyama forests and regional activation in Yogo town, Shiga prefecture. (In Japanese)
3. 鈴木 玲治 京都学園大学・准教授  
Reiji Suzuki, KYOTOGAKUEN Univ.

### ■ 第 68 回 .....

1. 2014 年 7 月 31 日 (木) 15 : 00 ~ 17 : 30  
July 31, 2014 (THU) 15:00-17:30
2. ブータンの若手研究者の佐々里での経験  
Experience of Young Bhutanese scholars in Sasari Village, Miyama-cho. (In English)
3. Ms.GURUNG / DIKSHA, Ms.WANGMO / YESHEY  
Mr. JAMTSHO / TASHI, Mr.TSHERING, Sherubtse College, Royal Bhutan University
4. 特に、土地利用、人口、行政と村の仕組みのブータンとの比較の報告  
Comparative Views on Land use, population and administrative system between local government and the village.

### ■ 第 69 回 .....

1. 2014 年 9 月 25 日 (木) 17 : 30 ~ 19 : 00  
Sep 25, 2014 (THU) 17:30-19:00
2. 地域研究の新しい可能性と活動分野 - ブータン国際交流科目を実施経験から  
New Field and Potentiality of Area Studies : Experience of conducting International exchange class by study tour of undergraduate Kyoto University Students in Bhutan (In Japanese)

3. 安藤和雄 東南アジア研究所  
Kazuo Ando, CSEAS, Kyoto Univ.

### ■ 第 70 回 .....

1. 2014 年 10 月 23 日 (木) 17 : 30 ~ 19 : 00  
Oct 23, 2014 (THU) 17:30-19:00
2. アジア農村における過疎・離農問題に挑戦する実践型地域研究  
Practice-oriented Areas Studies challenging the issues of De-Population and Abandoning Farming in Asian rural communities.
3. 安藤和雄 東南アジア研究所  
Kazuo Ando, CSEAS, Kyoto Univ.

### ■ 第 71 回 .....

1. 2014 年 11 月 27 日 (木) 17 : 30 ~ 19 : 00  
Nov 27, 2014 (THU) 17:30-19:00
2. すいたん農園農業塾 2014  
Farming school of Suitan Farm in 2014
3. 大西信弘 Nobuhiro Ohnishi, Kyoto Gakuen Univ.

### ■ 第 72 回 .....

1. 2015 年 1 月 29 日 (木) 17 : 30 ~ 19 : 00  
Jan 29, 2015 (THU) 17:30-19:00
2. ミャンマー イラワジデルタにおける生業と社会構造ーピャポン県オウツポ村を事例としてー  
Livelihood and Social Structure in Ayeyarwady Delta of Myanmar -Case Study in Oakpo Village in Pyapon Township-  
発表者：岡田夏樹 Natsuki Okada, ASAFAS
2. A CASE STUDY ON POSTHARVEST HANDLING PRACTICES OF CABBAGE AND CAULIFLOWER IN SELECTED AREAS OF MYANMAR  
Speaker : Than Than Soe Visiting Scholar of CSEAS (Yezin Agricultural University, Myanmar)

### ■ 第 73 回 .....

1. 2015 年 2 月 18 日 (水) 9 : 30 ~ 11 : 30  
Feb 18, 2015 (Wed) 9:30-11:30
2. 2 月 9 日～ 16 日間の美山町佐々里での PLA の結果報告会ー社会的ソフトウェアを使ったまとめー  
Reporting of PLA activities at Sasari Miyamacho Feb.9-16, 2015 : Application of Social Software-
3. Mr.Yeshi Penjor- Researcher, Sherubtse College, Royal University of Bhutan  
Mr.Tempa Lhendup- Researcher, Sherubtse College, Royal University of Bhutan  
Ms.Pema Tshomo- Junior Research Fellow, Sherubtse College, Royal University of Bhutan  
Ms.Karma Zam- Junior Research Fellow, Sherubtse College, Royal University of Bhutan  
Mr. Ngawang Tobgay- Junior Research Fellow, Sherubtse College, Royal University of Bhutan  
赤松芳郎、愛媛大学 Yoshio Akamatsu, Ehime University  
安藤和雄、東南アジア研究所 Kazuo Ando, CSEAS

### ■ 第 74 回 .....

1. 2015 年 3 月 26 日 (木) 17:30-19:00  
March 26, 2015 (Wed) 17:30-19:00
2. 実践型地域研究の 2014 年度の活動総括と 2015 年度の計画  
Reviewing the activities of Practice-oriented Area Studies in 2014 FY and the Plan for 2015 FY. (In Japanese)
3. 各フィールドステーションと実践型地域研究推進室関係者  
The members of Kei-Gi Field Stations and Practice-oriented Area Studies Department